



火の大切さ・火事の怖さ

怖いものの代名詞「地震・雷・火事・親父」。四番目は今となつては怖くないかもしれないかもしれませんが、三番目は古来より人々の生活を脅かす恐ろしいものです。

生産や調理、暖房、喫煙、花火、また信仰行事など、人々の生活に『火』はなくてはならない大切なものであり、『火』があることで人類は文化的な生き方を得てきました。しかし、この『火』の管理やコントロールをいっただん誤ると、恐ろしい『火事』として猛威を振ります。

出火原因

「寝たばこで布団を焦がした」「天ぷらを揚げていて、その場を離れ



てしまい気づいたら火があがっていた」「ストーブの近くで洗濯物を干していたら誤って火がついてしまった」「たこ足配線をしていたら煙が出てきた」など、出火原因や出火場所は普段の生活と密接に関係することが多いのです。『火事』は生活の中のちょっとした油断や不注意、過信などから発生しやすく、過去より、多くの命や財産を奪つてきました。

火災予防の合言葉

三河の生まれで徳川家康の家臣・本多作左衛門重次が戦地から国元の妻に宛てた手紙に、『一筆啓上 火の用心』

お仙泣かすな 馬肥やせ』とあります。古来日本の住宅は木と紙の住まいと言われ、火の取り扱いに大変気を使つていたことが伺えます。時は経て、現代は建物の不燃化やオール電化の普及などで火災件数は減少してきていますが、大切な命と財産を火事から守る予防と備えは時を経て変わらないものですね。



本多作左衛門重次肖像画 (所蔵：本多裕江氏、画像提供：取手市教育委員会)



ホンモノのチカラ

春の遠足シーズンがやってきました。生命の海科学館に来るチビっ子たちに「これなーんだ？」と水晶を見せると、「知ってる！ゲームに出てきた！」「知ってる！図鑑にのってた！」と元気な声が返ってきます。さし出される手のひらに水晶をそつと乗せると、「あれ？冷たくない！」という驚きの声がちらほら。見た目の印象から、氷のように冷たいイメージがあるようです。「知ってる！」と言う子どもたちのキラキラした目が、ホンモノ体験によって更にまんなきになっていきます。

さらめく水晶、マンモスのザラ

ホンモノのちから by たんぼぼ



ザラの歯、宇宙の匂いがある隕石など、見て触れて匂いをかいで得た体験は、「知ってる！」をより本物の知へと近づけてくれます。それは大人も一緒ですよ。野イチゴ摘みに磯遊びなど、春のレジャーでホンモノ体験を味わうなら、虫眼鏡と図鑑持参がおススメです。